

インターネット、自己、そして日常生活の経験

ジェームズ・スレヴィン

出典：

James Slevin, *The Internet and Society* (←本です) , Polity Press, 2000, Chap. 4

キーワード：自己(self)、自己の投影(the project of the self)、自己のジレンマ(the dilemmas of the self)、生活戦略(life strategy)、自己形成の変容(the process of self-formation)

本論文は、「インターネットがどのように自己と毎日の生活の経験を豊かにして、そして変えていくのか」について論じたものである。今日では、個人は自己の投影(the project of the self)を再評価する試みにおいて、また、増えつつある複雑な不確実な世界を進んでいく試みにおいて、インターネットのようなコミュニケーション技術を用いなければならないことに直面している。

筆者の視点は個人にかかわる問題がある一方で、自己の計画の変容や制度上の変容が相互依存の過程にあると理解されなければならないとしている。それ故、自己は個人の背後で排他的に操作する力によって変容されるものではない。その反対に、自己の投影は、個人が積極的にかつ知的に関係させるようなものである。にもかかわらず、筆者がこの仮想共同体の分析において強調したいのは、このような知識能力がつねに、その活動の結果が結局、より不確実なものになるために向けられているということである。自己の計画の適切な理解はこうした制度的な文脈が時間-空間の中で生産され、また再生産される方法を理解し制限するための本質的に必要なものである。

1・象徴的投影としての自己のジレンマ

まず始めに、現代において私たちが象徴的な計画としての自己(the self as a symbolic project)をどのように考察するか。そうすることで、一貫とした自己の物語を保護するために我々が解決しなければならない特有の問題をあげている。自己のジレンマとは、Giddensが一貫とした自己の物語(narrative)を獲得するために個人が解決しなければならない問題のことである(Giddens, *Modernity and Self-identity*)。

Giddensは「現代が求めている安全というのは、日常生活のレベルにおいて、人間にとってモラル・ジレンマを引き起こす本質的な問題から社会生活を引き離すことに依存している」と主張する。実際に、このことは人生計画と関連したさまざまな不安を減らすために「経験上の分離」というプロセスを含んでいる。例えば、生活していく上でありそうにない経験などを捨象することで、我々は日常生活から狂気、犯罪、病気、死などを扱う経験を隔離したのである。我々の世界が喧騒としており、個人が直面するこれらのジレンマがある中で、筆者は、インターネットが自己のジレンマを激しくする一方で、インターネットは今まで以上に恐怖や抑圧から防ぐ技術や戦略を発展させることを含んでいるかもしれない、と指摘する。

現代の世界で生活することについて、Giddensは個人が自己の一貫として物語を獲得する際に

解決しなければならない4つの「自己のジレンマ」を認識することが必要であるとしている。以下ではその4つの「自己のジレンマ」を順に紹介していくことにする。

(1) 統一 対 分解 (Unification versus fragmentation)

現代とは、一方で個人が多様なオプションの中で選択を取り決め、また他方では、個人が経験の遠くにある骨格へと作り上げることができる程度まで調停的な自己が高められる。これらの遠くにある骨格は個人に近くにある骨格より自己の一貫とした物語を作り出すための資源をより入手可能にする経験を提供するかもしれない。Giddens は局地化された信頼関係が自己の完成された計画を促進するのに十分な役割を担っていることは否定しない一方で、遠くでかつ調停された事実は必ずしもそれらが不透明であることを表しているのではない。

(2) 無力 対 専有 (Powerlessness versus appropriation)

日常的な面の外側にある遠くてかつ大規模な出来事について、個人は無力という感情を経験するとしばしば主張される。だからといって、小さなコミュニティーへの参加は必ずしも個人がより強力となるという保証はないし、大部分において（小さなコミュニティーにある）伝統は独立した行為に対する視点を超えて変わることはない保持というものを持っている。

(3) 権威 対 不確実性 (Authority versus uncertainty)

Giddens は、反省的な現代という条件のもとで、決定的に十分な権威がないことを認識している。いつでもリスクについて危惧する個人というのは背後にある現象が不確定であるものを「日常的」ではないと見なすのである。たいていの個人は不確実性と協調するための戦略を発展させるのである。個人は日常のある特定の選択をする場合に、特定の専門システムの選択に絶大なる信用をおくかもしれない。人々はこのようにして日常の活動にある不安をとりのぞくことに成功するのである。

(4) 個人化された経験 対 商品化された経験 (Personalized versus commodified experience)

Giddens が「現代は自己の投影を広くするが、そのような状況のもとで現代は商品資本主義のスタンダードな効果に強く影響されている」と述べているが、このような影響は自己の投影に直接的な影響を与えるのわけではない。というのは、個人は活発的でかつ創造的な活動の中でスタンダードな影響を描き出すかもしれないからであり、個人がその活動を適切にすることができる程度というのは、一連の緊張と矛盾であり、適切な対応をマスターする能力に依存するためである。

現代において個人が直面するこれらの自己に光をあてると、我々は日常の生活という点で、変化を超えて獲得するものは、外界の社会から退却することよりもむしろ外界の社会に参加することを要求していると Giddens の文脈から読みとれるが、インターネットが自己のジレンマを激化しているかぎりにおいては、インターネットは意味のない抑圧された脅しを積極的に防ぐための技術と戦略を発展させるような参加をより必要としているのである。

2・生活戦略とインターネット

インターネットは個人に入手可能な情報を多岐にわたって提供しており、同時に、インターネットは調停的された、また一時的に調停的された相互行為を具体化する。

これらのオプションと重荷を通じて個人は自己の一貫とした物語を構築し、そして促進することを認めるようなものを作りださなければならない。しかし、筆者は、自己の投影を「最善なものにする」ためにこの新しいコミュニケーションを用いるために、必要な技術と戦略を発展させる際に、どのようなオプションを我々個人として持つと言わなければならないのか、を疑問視する。以下では、反省的な現代の下で、自己形成の新しいメカニズムが現れはじめ、これらが日常における「自己のジレンマ」を解決する過程と直接的に関連していることを詳述するために、ここでは、Bauman の『断章の中の生活(Life in Fragments)』を用いて4つのタイプの「ポストモダンのアイデンティティ」について説明することにする。

インターネットを生活の手段(戦略)として利用する人はどのようなタイプに分類されるか。Bauman の『断章の中の生活』によると、一貫とした自己の物語を形成するタイプの1つとして「巡礼者(the pilgrim)」タイプをあげている。このタイプの人は、人生にはある決まった目的が存在しており、その目的に向かってまっすぐと(決して途中で曲がったりせず)進む人のことを指している。それと同時にこの「巡礼者」タイプの人は、インターネットという仮想の中の世界の産物であるがため、彼らにとって、インターネットが一貫とした自己の物語をつくりあげていく上で彼らの生活を促進させたりすることは受け入れ難いかもしれない。しかし、現代ではインターネットの拡大を否定することはできない(Bauman はこのようなインターネットが存在する世界は巡礼者タイプにとって適さないと主張している)。そこで Bauman は、巡礼者タイプに変わってポスト・モダンにおける生活戦略の特徴を放浪者(the stroller)タイプ、ならず者(the vagabond)タイプ、観光客(the tourist)タイプ、プレイヤー(the player)タイプの4つに分類する。

「放浪者」タイプ

インターネットとはコミュニケーションを高める理想的な場所であり手段
⇒さまざまなWeb ページを閲覧することで究極の当座的な自由に浸る

「ならず者」タイプ

インターネットとは隠れた自分のしたいことをできる場所
⇒Web ページの管理者をどうやって困らせるかに終始する

「観光客」タイプ

インターネットとはマウスをクリックするだけで異なった体験に参加できる場所
⇒なじみのある世界から離れ、異なった人生観をもった他人と対話することに入り込む

「プレイヤー」タイプ

インターネットとは外にあるコンピュータゲームのようなもの
⇒とにかくゲームに勝つことが目的である

これら4つの生活戦略がネット上ですべてのコミュニケーションの可能性を使い果たすのであれば、現実世界との関係から自己の計画をつくりあげるうえで障壁になるであろう。インターネットと生活戦略について、こうした利用は個人の行動のある特定の局面を貧しくするという点では Bauman の主張は的を得ている。しかし、インターネットが新しい可能性を拓けていくことを否定することは困難であるが、筆者は現代の状況しだいで一貫とした自己の物語をつくりあげることは変容するという点では Bauman の主張と一致している。

3・自己形成の過程の変容

社会学や文化学の理論家たちの視点から最近の現代性に関する自己の投影を考察することで、筆者は、現代の経験的な研究に関して追従されているインターネットやコミュニケーション、それに自己や経験の話題を批判的に考察することを要求する。筆者は、それらは、どのように人々がインターネットを意味のない脅しや抑圧から積極的に除去することを発展するのかという知識について何を提供しなければならないのか、また、人々が肯定的な生活戦略の一部としてコミュニケーションをするために、インターネットを上手に使うことを提案する証拠が存在するのか、を問題にする。

以下では、インターネット・コミュニケーションの対称的な2つの研究を紹介する。まず、Robert Kraut らによる「インターネット・パラドクス」という調査であり、もう1つは、Daniel Candler の研究で、ホームページによるコミュニケーションにおいて個人と公共のアイデンティティーを新しくする過程を述べたものである。

[1：インターネット・パラドクス 「孤独と憂鬱」・「友情と幸福」]

最初の研究事例はインターネットが社会的かかわり合いや心理的幸福をもつかどうかについてのものである。Kraut らによって報告されたこの研究は「ホームネット・プロジェクト」と呼ばれ、1995年3月からペンシルバニアの73世帯、169人を対象に2年がけて調査したものである。調査方法を簡単に紹介すると、各世帯にインターネットに自由にアクセスできる設備（コンピュータ、ソフトウェア、電話回線など）を提供し、その使用感についてモニタリングをするというものである。

最初の調査結果によると、「インターネットを多く利用すると、それだけ家族とのコミュニケーションが減った」という回答や、「孤独感」を生じるもの、それに「現実生活からかけ離れている」といった回答があった。

この調査結果から研究者たちは、インターネットとはテレビや電話のようなものであると言及した。彼らによると、テレビが社会的かかわり合いや精神的幸福の減少を引き起こしたのはもつともだ、としている。というのは我々はテレビの前でかじりついている間は社会的活動をしておらず、インターネット経由で我々が情報を得ようとするときも、これと似たような状況がおこる。その一方で、研究者たちはインターネットは個人的なコミュニケーションのために用いられることもあるので、電話みたいなものであるかもしれないと主張した（このような意味では、電話はテレビよりもはるかに社会的である）。

こうしたことから、研究者たちは「インターネットは社会的な結びつきを作り出したり維持したりする点で、身体的な接近という重要性を減らしており、（中略）…技術がより利便性のある

ものになるまで、我々はインターネットの利用を差し控え、その利用を監視すべきだ」という見解をもって締めくくった。

しかし、さきほどの調査の他に、肯定的な体験を持った回答も存在した。例えば、「遠くにいる子どもと連絡をとることができた」とか、「学校を卒業した後でも友情が続いている」などというものである。こうした出来事は量的にはごくわずかであるが、人生をかえるほどの重要なものである。

[2 : Web 上でのアイデンティティを構築すること]

次の研究事例は個人がアイデンティティを形成するために、どのようにホームページを用いるかについてのものである。この研究をした Candler は、我々がホームページを作ることは単に Web ページを構築するものではなく、個人のホームページというのは作成者のアイデンティティの構築を反映するものだとしている。

当然、各々の作るホームページは内容、形式などにいたっては多岐にわたる。ホームページ作成者がどのようにあるいはなぜ自分たちのホームページを作成したのかということについて個人の活動や広範囲なかかわり合いを Chandler の研究は示している。Chandler の研究に協力した人物は自分のホームページに「ホームページは自分が誰であるのかを定義するのに役立った。ホームページを見始める前や書き始める前は、私は自分がどんな気持ちをもっているのか分からなかったが、ホームページを見たり、書き始めたりした後では、少なくともアイデアが1つ以上浮かぶのだ」とコメントしている。Chandler は「作成者にとってホームページに載せたどうでもいい内容が、別の人々には重要なものとなることがあり、一貫とした自己の物語を作り上げるマテリアルとしてホームページは十分存在しうる」と指摘している。

4・インターネットと自己形成の過程を豊かにすること

インターネットに取り入れる4つの提言

現代において、個人は個人的感情的生活の中で大きな変化に直面している。この文脈とともに、インターネットの使用が彼らの経験を変えるということもまた事実である。筆者はこの最後の章で、個人がインターネットを生活戦略の中で展開するのに役立てるかもしれない4つの特性について説明する。しかしそれは、彼にインターネットを我々が文化的変容の様相として扱う場合に、我々はインターネットがどのように自己形成の過程を豊かにし変容するのかを理解するのである。インターネットは単に現代のコミュニケーション・テクノロジーの道具として個人に加えられたものではないのである。

(1) 経験を取り決めるためのインターネット技術の利用

インターネットが個人にとって経験を取り決めるような機会を増やす一方で、我々はそのようにできる限界についても自覚する必要がある。我々は入手できる情報が多量にあるので困惑してしまったり、必要な情報や人物にアクセスできなかつたり、自分の経験などに照らし合わせたつもりで検索したホームページが役に立たない情報であったりする場合がある。こうしたインターネットの使用はやはり我々に経験を交渉する能力に限界があることを自覚させようであろう。し

かしインターネットがいつもそうであると考えるのはおかしなことである。

活発にインターネットと交渉することは同時に積極的な経験である。仮にインターネットが故意に孤独と憂うつをおこすように設計されているのであれば、インターネットはかなり異なったものとしてみるができるが、インターネットは経験を交渉する試みにおいて個人を支援する多くのコミュニケーションを提供する。したがってインターネットにアクセスする人はこの技術がより有用なものへと発展するまでは使用を差し控える必要はない。

(2) 知識と技術に充てるインターネット技術の利用

インターネット技術は「届く範囲で」普通ではないような出来事に介在する個人の能力を上げている。もしインターネットが自己形成のプロセスを豊かにして変えるために用いられるのであれば、我々は知識と技術を再び取り入れる戦略を発展しなければならない。我々はこのような試みがなされる社会的文脈の中で理解しなければならのであって、現代において適当ではなくなった知識や技術を変えていくことを学んでいく必要がある。

(3) 相互関係を作り出すインターネット技術の利用

インターネットを用いて外の世界と積極的に参加することは関心や見解が異なるかもしれない他の人に対して自分の考えを表すことができるように自分の意見をはっきりと言うことを意味している。そのような意味でインターネットは新しい関係をつくるために、新しい社会に参加するために、そして他の人の異なった意見を聞くために大きな機会を提供している。

(4) 危険と不確定を追跡して、対立を超えるインターネット技術の利用

インターネットは個人に自分から離れたところで起きている出来事や経験をもたらしたり、文化的に相容れない性質のものが含まれていたり、それがお互い敵対するものであるかもしれない。これらの経験のいくつかは我々を困惑させるかもしれないが、これらの経験を考察し管理していくことは決して不可能なことではない。常に興味の衝突の可能性と個人のこのような状況のもとで対処する能力は、それらは共存しなければならないし、あるいは共存しようと務める社会的に構造化された文脈によって条件づけられるのである。

これらはインターネット・テクノロジーが矛盾を扱う新しい方法を提供する4つの方法である。インターネットは矛盾の発展や矛盾の性質を監視したり、その安全性を評価するために使用される。このようにインターネットは彼らに意識的に恐れやその反応をうまく扱うことを許可するかもしれない。次に、インターネット・テクノロジーは個人に対話を通じて文化的な相違と協調することを許可するかもしれない。そして、より多くのコミュニケーションが、少なくとも潜在的に、精神的な態度としてより多くの相互理解とコスモポリタニズムを導くかもしれない。そして最後に、インターネットは、日常的な生活の規則性から離れた経験を与えるかもしれない、ということである。この4つのことは、さまざまな経験のうちのいくつかはショッキングで困らせるものがあるかもしれないが、インターネットを、上の4つのことを通じて、使用することは不可能なことではない。我々の現代生活は不安に満ちており、ほとんど統制のない状況の中にいると感じるかもしれないが、インターネットは個人に我々の世代に適切な新しい制御の形式を再び課

すような多くの新しい方法を提供するのである。

(川端崇)